



坂上田村麻呂の悪竜退治

鴻巣に活躍した人々



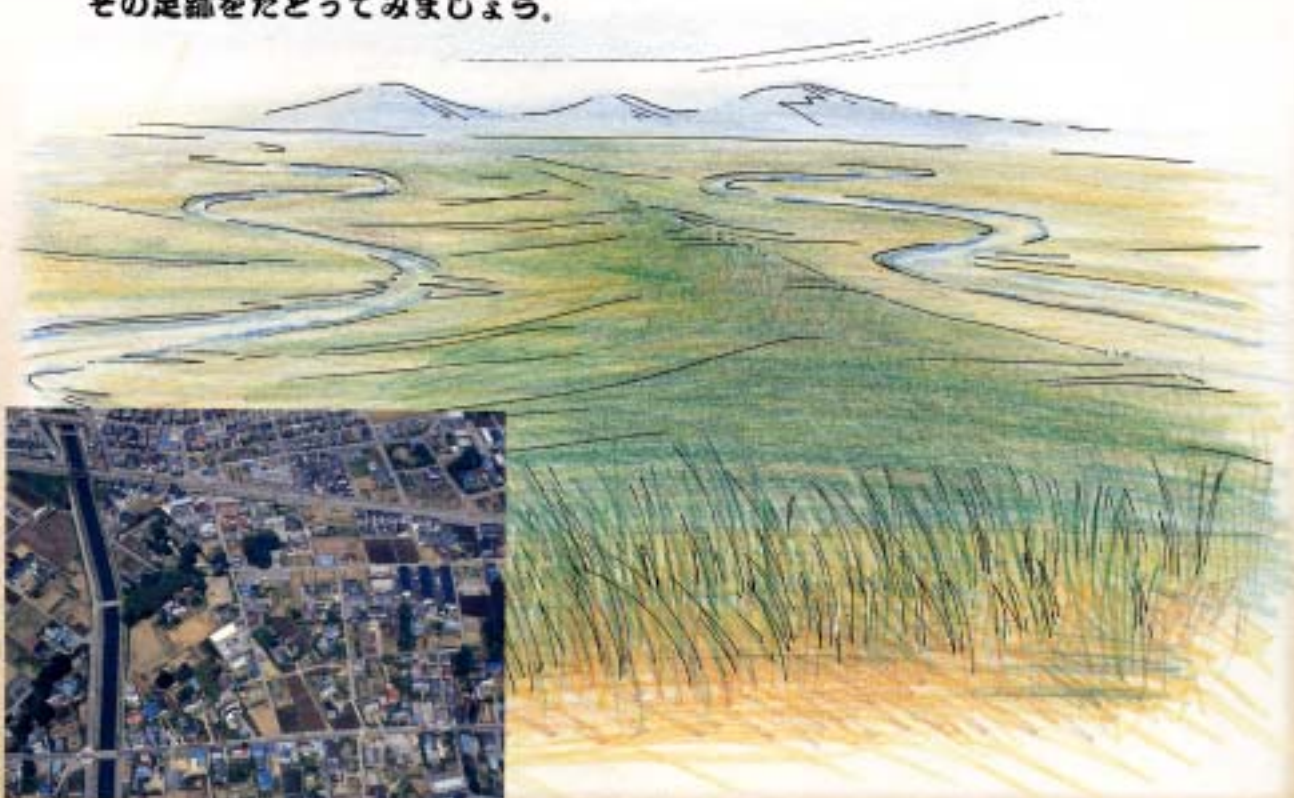
(的祭の起源説話)

—伝説から実在の人物まで—

「このす」という地名が記録に初めて登場するのは、戦国時代末(16世紀)のことです。それ以前のこの辺りは、奈良・平安時代には武蔵国足立郡むさしのくにあだりてんに属し、鎌倉・室町時代には馬室郷まむろごうや箕田郷みだごうなどの地名が見られます。また、その徳江戸時代には中山道なかやまみちの鴻巣宿こうすしゆくとして広く知られるようになります。しかし、どのような理由で「鴻巣」と呼ばれるようになったのかはよく分かっていません。

今のところ、荒川に挟まれた山高い土地を「高州」と呼んだという、地形からの由来がもっとも注目されています。

一方、各時代にわたって、この地を中心に有名無名にかかわらず多くの先人たちの活躍があったことが知られています。現代に生きる私たちは、これらの人々の恩恵を様々なかたちで受けており、文化の発展に寄与するという精神は、脈々と引き継がれています。ここでは、こうした先人たちの活躍にスポットを当て、その足跡あしあとをたどってみましょう。

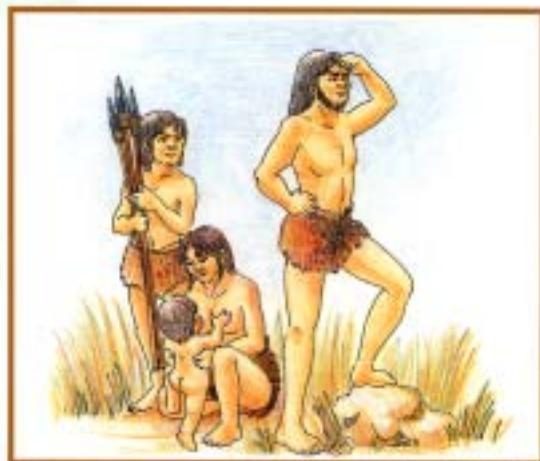


「今は昔…」・箕田源氏発祥の地

太古の鴻巣(想像図)

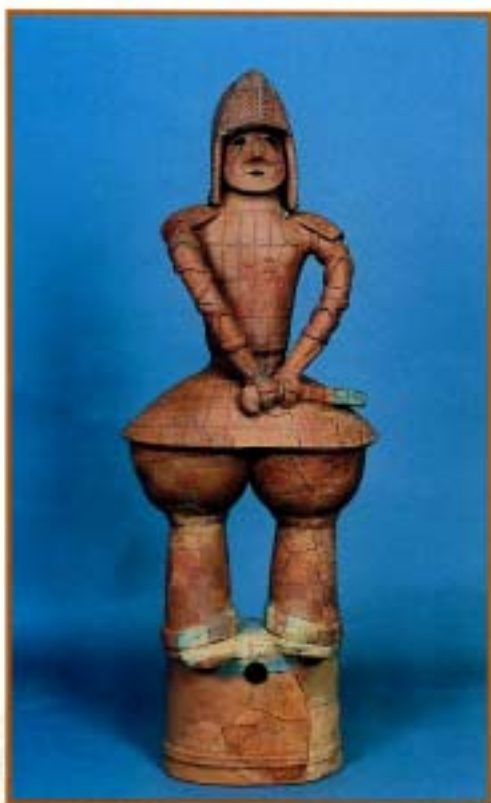
鴻巣最古の住人たち

鴻巣の地に最初に人々が住んだのは、今から約2万年前の旧石器時代のことです。獲物を追って長い旅路の果てに、ここに一時の生活の場を求めた彼らは3つのテントを張り、定住することなくまた何処かへ旅立って行ったのでしょう。その場所には狩りの道具である石器や調理場の跡が残されています。



旧石器時代の人々（想像図）

むさしのくにのみやつこかさはらのあたのおみ 武蔵国造笠原直使主



古墳時代の武人の姿（生田塚遺跡出土）

『日本書紀』安閑天皇元年（534）の条には、武蔵国造笠原直使主と同族の小杵が国造の地位を争い、朝廷の援助を受けた笠原直使主が勝利し、そのお礼に4ヶ所の屯倉を献上したという、一般に「武蔵国造の乱」と呼ばれる記事が載っています。

この時代の武蔵国造の墓は、行田市埼玉古墳群に比定されており、笠原の氏をもつ直使主なる人物は、現在の笠原周辺の出身と考えられています。当時、中央の正式な歴史書に名を残す人物がいたことは、この辺りが中央と関係の深い地域であったと言えます。また、武蔵国の長官になった人物がこの地域に勢力をもっていたとすれば、地名の由来の一つである国府がこの地域にあったとする伝承とも深く関連するものでしょう。

この記述が史実かどうかは明らかではありませんが、笠原直使主が実在の人物であったとすれば、6世紀前半頃の生田塚遺跡における埴輪生産の管理者（最高責任者）であったのかも知れません。

さかのうえのたむらまる 坂上田村麻呂

平安時代の延暦年間（782～806）、征夷大將軍に任命された坂上田村麻呂は、東北鎮圧の際に当地に立ち寄り、この地方で田畑を荒らし回っていた悪竜を矢で射貫いて退治したという伝承があります。「滝馬室の的祭」の起源説話になっていますが、田村麻呂は各地の英雄伝説にたびたび登場する人物であり、將軍という人物像が結びついたものと考えられます。

せいわけんじ

清和源氏の祖

みなもとのつねもと

源経基

源経基（917－961）は、清和天皇の第6皇子貞純親王の子で六孫王と号し、応和元年（961）源氏姓を賜ります。源氏の系統中、後に最も栄えたのは経基を祖とする清和源氏で、頼光、義家、義朝、頼朝などが輩出しています。経基は武蔵介となつて関東へ下り、現在、その居館が鴻巣市大間にある伝源経基館跡（通称城山）に比定されています。

源経基の名前は「将門記」や「貞信公記抄」などの文献に見られ、その行状が広く知られています。それによれば天慶元年（938）、武蔵権守興世王・介経基と足立郡司武蔵武芝との間に争乱が起こり、この紛争の調停に平将門が介入しています。この事件は後の「平将門の乱」の契機となったもので、この頃土着武士や郡司たちの実力が中央政府に脅威を及ぼす程に強大になっていたことを物語っています。乱は天慶3年（940）、藤原秀郷（依藤太）や平貞盛



らによって将門が討伐されて終了しますが、この時経基は将門追討の征東副将軍に任じられています。

なお、京都市南区の六孫王神社に経基のものと伝える墓があります。



伝源経基館跡（大間）

源経基の活躍を伝える真田碑（真田氷川八幡社）

みだげんじさんだい

箕田源氏三代(源仕・源宛・渡辺綱)

源 仕 (任) 生没年不詳。嵯峨天皇の皇子である源融の孫。延喜19年(919)、前の武蔵権介であった仕(任)が、国衙の官物を奪い国府に来襲し、時の武蔵守高向利春を攻撃する事件が起きています。この事件は、仕が国司の任期終了後も都へ帰らず武蔵国に残り、国府襲撃が可能なほどの軍事力を蓄えていたことを表わしています。



仕と妻子の墓と伝えられる箕田2号墳(別名三士塚)

一方、別の書によれば、仕は介経基を助けて、「承平・天慶の乱」に功を立てて武蔵守に任じられています。

源 宛 (充) 生没年不詳。武蔵権介仕(任)の子と伝えられます。「今昔物語集」巻25第3には平良文(村岡五郎)との一騎打ちの武勇が語られています。箕田を本拠とし、無官で箕田源氏と称しています。

渡辺綱 (953—1025) 嵯峨源氏で箕田源氏宛の子。幼少にして両親を失い、養母の摂津国渡辺(大阪市東区)で養育されたので渡辺氏を名のり、渡辺党の祖とされています。

源頼光の郎党で武勇に優れ、坂田金時(金太郎)・碓井貞光・卜部季武らと共に四天王と呼ばれました。頼光に従い大江山の酒吞童子(鬼)を退治したり、平安京内の一条戻橋で襲ってきた鬼女の腕を切り落としたりしたという有名な説話があります。



みだげんじ やかた でんみだやかたあと 箕田源氏の館 伝箕田館跡

これら箕田源氏三代の館は、箕田2号墳の南方に存在したと伝えられていますが、現在はその推定地付近に石碑が立つのみで、当時の面影を留めるものはありません。また、近年の付近一帯の発掘調査によれば、方形に巡る構え



伝箕田館跡推定地に立つ石碑

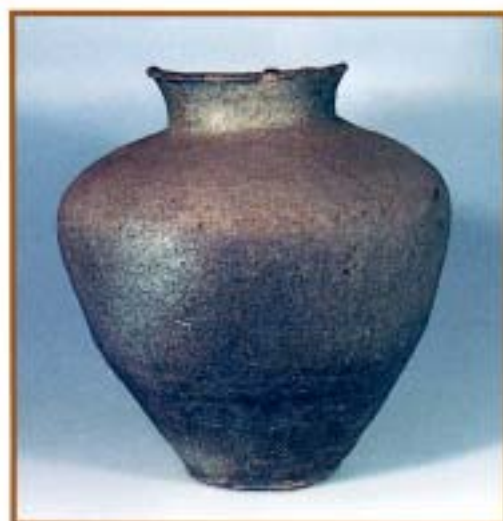
源宛と平良文の一騎打ち 堀に囲まれた居宅跡が検出されていますが、時代的には鎌倉から室町時代のもので、平安時代中期の箕田館跡を直接裏付ける遺構や遺物は発見されていません。あるいは箕田源氏の流れを汲む一族がその頃ここに開発領主として館を構えていたと考えられます。

なお、箕田2号墳は別名サンシヅカ(三士塚)とも呼ばれ、仕とその妻子の墓という伝承があります。しかし、2号墳は古墳時代後期(6世紀後半)に造営されたことが確実で、時代的には大きく異なるため、箕田源氏三代の伝承と後世に結び付いたものと思われる。

ごけにん あだちとうくろうもりなが

鎌倉幕府の御家人 安達藤九郎盛長

安達藤九郎盛長（1134－1200）は、治承4年（1180）源頼朝の拳兵に^{さかひのくに}応え、相模国（神奈川県）にて功をあげ、頼朝の信任を受けました。また、鶴岡八幡宮の奉行^{みせやうじん}人となり、正治元年（1199）頼朝の死去の年に出家して蓮西^{れんさい}と号しますが、その後も北条時政、大江広元などと鎌倉幕府の要職にあつて、重要訴訟や裁決に参加しました。正治2年（1200）66歳で死去しました。



鎌田出土の磁骨器（12世紀・遷美窯産）

伝承では、鎌田に所領と館があり、放光寺を創建したと言われています。現在、同寺には、藤九

郎盛長の肖像とされる木像が残されています。木像は寄木造りの玉眼入りで、法衣に袈裟をまとい右手に扇子、左手に念珠（推定）をもつ姿は、入道蓮西と号してからのものと言われています。南北朝時代（14世紀）の作品と考えられています。



安達藤九郎盛長像（鎌田放光寺）

かんとうぐんだい いなただつぐ ただはる

関東郡代 伊奈忠次・忠治

伊奈氏は信濃（長野県）伊那郡の出で、忠家の時三河松平氏につかえ、三河国小島城主となります。伊奈備前守忠次（1550～1610）

は忠家の子で、はじめ松平信康（家康の長男）に属しますが、後に家康に仕え足立郡伊奈、鴻巣の地に1万石を賜り、初代の関東郡代に任じられました。土木技術に優れ、治水、灌漑、新田開発などでめざましい活躍をし、特に河川改修では後世、「利根川の東遷」の原点と言われる「会の川の締切工事」（1594）が有名です。



伊奈忠次・忠治の墓（本町磨額寺）

この忠次の後を継いで手腕を発揮した

のが、次男の伊奈半十郎忠治（1592～1653）です。忠治は父の忠次と同様、関東の諸開発を進め、治水では本格的な「利根川の東遷」、「荒川の西遷」を行った人物とされています。

伊奈氏は忠次、忠治以後代々関東郡代を世襲し、それまで不毛の湿地帯が多かった関八州（関東地方）の開発など内政面で大いに力を発揮しました。これらの事業のおかげで、関東の天領の石高は大いに増え、大都市江戸の経済を支える基盤となりました。

伊奈忠次・忠治とその夫人たちの墓は、勝願寺境内にあります。

江戸期の俳人 よこたりゅうき 横田柳几

本名を横田三九郎盛英（8代目）といい、享保元年（1716）鴻巣宿に生まれました。家業は歴代酒造業を営む旧家で、元の石橋町（現本町6丁目）にありました。若くして俳諧を学び、初め伊勢の中川乙由の門に入りますが、後にその高弟佐久間柳居に師事し、布袋庵柳几と号しました。生涯を通じて旅を好み、多くの紀行文を残しています。また、全国の有力な俳人と交遊があったようですが、横井也有との関係は特筆されています。

宝暦13年（1763）、芭蕉翁70年忌にあたり追善興行として布袋庵に20余名が集まり、1日千句の吟を行っています。



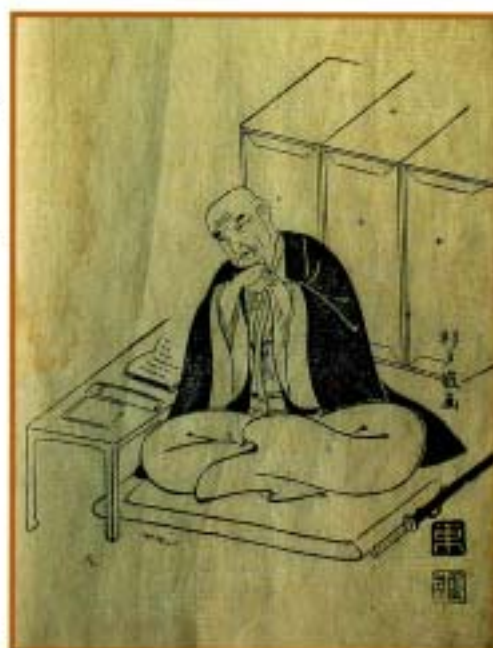
芭蕉忌千句塚（本町勝願寺）

そして、天明7年（1787）には、その千句を壺に納め、菩提寺の勝願寺に「芭蕉忌千句塚」を建立しています。

編著に「つくば紀行」「百花集」「大和耕作集」などがありますが、明和4年（1767）の「振り袖火事」で布袋庵も類焼し、多くの作品が失われてしまったようです。

天明8年没。享年73歳。

鴻巣には柳几の門人が多く、「武蔵鑑」を著した福島杉夕（東雄）や上谷の医師松村篁雨もその門です。



寛政6年「布袋庵句集」柳几肖像画（県立浦和図書館蔵）



横田柳几の墓（本町勝願寺）

かとうまさのすけ
加藤政之助

安政元年（1854）7月北足立郡滝馬室村の旧家に生まれ、16歳で家督を継ぎ、明治4年（1871）には戸長に就任しています。明治8年（1875）埼玉県学務課に勤務しますが、学問の必要性を感じて職を辞し、慶応義塾に入学します。明治11年慶応義塾卒業後、福沢諭吉の紹介で大阪新報社に入社。明治13年埼玉県議員に当選し、以後明治23年までの約10年間県議員を務め、その間8年間議長の席にありました。

明治25年第2回衆議院議員選挙に当選し、以後第15回衆議院総選挙まで第4回と第14回を除き当選しています。また、昭和2年貴族院議員に勅撰されています。

一方、40年に及ぶ政治活動の傍ら、実業界や教育界においても大きな足跡を残しており、北海道の利別（現今金町）の開拓事業や石油掘削事業などを手がけています。

特に教育関係においては、大阪商業学校（大阪商科大学）をはじめ、大正10年鴻巣高校の前身にあたる武陽実業学校を創設し、初代校長を務めています。さらに大東文化学院（大東文化大学）の総長に就任するなど教育の発展に尽力されました。

昭和16年、享年87歳。墓地は馬室常勝寺にあります。



加藤政之助



政之助の生家（滝馬室）



加藤政之助直筆の書（質田・矢島家旧蔵）

鴻巣周辺は、地形上古くから豊かな土地と水利に恵まれ、交通の要衝にあったといえます。このことは、原始・古代より人々の確実な営みがあり、各時代にわたって伝承や記録に名を残した有名人を輩出していることからもうかがえます。

ここでは、鴻巣の歴史に登場する代表的な人物を紹介しましたが、この他にも多くの先人たちの活躍があったことが明らかです。私達は、今回、直接触れることのできなかったこれらの人達が鴻巣の発展に果たした役割の大きさについても忘れてはならないでしょう。

コラム1 記録に見る鴻巣の地名

鴻巣という地名は、延文6年(1361)9月9日の日付がある「市場祭文」の中に「かう之すの市」とあるのが最初ですが、この年紀は疑問とされ、祭文の成立時期は戦国時代頃と考えられています。

コラム2 糠田出土の蔵骨器

この壺は、愛知県渥美郡産の広口壺で、製作年代は12世紀末頃(平安時代末～鎌倉時代初頭)と考えられます。火葬用の蔵骨器として利用されたものですが、当時この地に有力武士層が存在したことを示す資料です。(放光寺蔵)

出典の解説

- 「日本書紀」 養老4年(720)の舎人親王らによって編修された日本最古の歴史書。全30巻。六国史の第1番目にあたり、神代から持統天皇に至るまでの歴史が編年体で書き述べている。
- 「将門記」 平将門の乱の経過を描いた軍記物で、乱の直後に成立したと考えられている。著者は不詳。
- 「今昔物語集」 12世紀前半に成立した説話集で、編者は不明。本来は全31巻からなり、インド・中国・日本の説話1079を収めている。話の書き出しが「今は昔」で始まるのが書名の由来。
- 「吾妻鑑」 鎌倉時代後期に幕府によって編さんされた編年体の記録。治承4年(1180)から文永3年(1266)に至るまでの幕府関係のさまざまな事蹟が和様漢文で記されている。



六孫王源經基

このパンフレットを制作するにあたって以下の資料を参考としました。

- ・「埼玉人物事典」 平成10年 埼玉県
- ・「鴻巣史話」 昭和44年 鴻巣市郷土研究会編
- ・「鴻巣の文化財」第1集 昭和36年 鴻巣市教育委員会・鴻巣市文化財保護委員会
- ・「鴻巣の文化財」第2集 昭和53年 鴻巣市教育委員会・鴻巣市文化財保護委員会
- ・「鴻巣市史」資料編1～6 平成元年～7年 鴻巣市
- ・「加藤政之助回顧録」 昭和30年 加藤憲章

鴻巣の文化財 第3号

鴻巣に活躍した人々—伝説から実在の人物まで—

平成14年9月5日

編集 鴻巣市教育委員会

発行 鴻巣市教育委員会・鴻巣市遺跡調査会